



Title	吐魯番出土文物研究会会報 第58号 : 唐代領抄文書特集
Author(s)	
Citation	吐魯番出土文物研究会会報. 1991, 58, p. 1-4
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/78869
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

吐魯番出土文物研究会会報

第58号

1991年4月1日

吐魯番出土文物研究会

唐代領抄

文書特集

中央アジア出土唐代領抄文書一覧

關尾史郎編

【はじめに】

唐代、各種の税の納入者に対して官府・官員から交付された文書としては、トルファンから将来された大谷文書中の納税抄（その大部分はいわゆる周氏一族文書である）が広くしらされていたが、池田温氏の『中国古代籍帳研究－概観・録文－』にも集録されているように、トルファンからはこのほかにも納税抄が出土しているし、また同種の文書はトルファンに限らず、クチャやホータンなど中央アジアの各地から出土しているのである。さらに近年、『吐魯番出土文書』の公刊によってトルファンからも新たに多数の納税抄が出土していることが明らかになった。このうちホータンから出土した納税抄などは、その出土地からして、これらを唐代文書として一括してしまうことには異論もありえようが、唐の西州治下にあったトルファンで作成された文書と様式や機能を等しくしており、少なくとも文書行政システムといった観点からすれば、両者をきりはなして考えるのは正しい方法ではないだろう。

私はこれら一連の文書について、先行する高昌国の條記文書とあわせて集成の作成・編集を予定しているが、ここではとりあえずトルファン、クチャ、およびホータンといった出土地ごとに納税抄を作成=交付年代順に表示することにした*。唐代の徵税と納税のシステムと実態に関する一次史料であるにもかかわらず**、この文書群の全貌を把握する作業は現在まで試みられることができなかつばかりか、そのような作業の必要性すら正当に認識されてこなかったことを想起すれば、このような細やかな試行にもいくばくかの意味があるだろうと思ってのことである。

なお從来この文書は納税抄と呼ばれていた。それはこれが税の納入を証明するための書き付けで、しかも実際に本文の末尾が「抄」字で終わっているという性格と様式の両面から理由づけができるが、新たにトルファンから出土したものから、元来は末尾が「領」字で終わるのが一般的であったことが明らかになった。またこれを納税抄と呼ぶと、宋代の納税抄と、その文書としての性格や機能の相違を明確にできなくなるおそれもある。したがって以下では表題も含め、「納税抄」にかわって「領抄文書」という呼称を用いることとする。

*表はいずれも、内陸アジア出土古文献研究会例会（一九九一年二月一六日 於東京東洋文庫）において、「中央アジア諸地域から出土した唐代の領抄文書（納税抄）とその周辺」と題した報告を行なった際に配布した資料を一部補正したものである。

**ホータンからはほぼ同時代の付札木簡も出土しているので、今後の検討いかんによっては文書の機能について豊富な新知見も期待できよう。

事務局（連絡先） 〒182 東京都調布市国領町5-19-14

荒川正晴方 TEL 0424(81)4633

吐魯番出土文物研究会 (The Research Society for Turfan Relics)

表 I トウルファン出土唐代領抄文書一覧

民名だけで官職の記載を欠いていることを、官職の右上の*は、その官員が自署していることを示し、数字は官員の員数である（複数の場合のみ）。
交付者の官職欄と末尾表記欄の空白は当該部分が欠損

書：国家文物局古文献研究室・新疆维吾尔自治区博物館・武漢大學歷史系編《吐魯番出土文書》（第五冊：一九八三年、第六冊：一九八五年、第七冊：一九八五年）。

表II クチャ出土唐代領抄文書一覧

No	文	書	表	題	交付者の官職	末尾表記	文書番号(整理番号)	録文	備考
1	丙午(826?)年三月將軍此 <u>國</u> 奴納烽子錢抄抄抄	*	*	黃文弼氏將來	塔里木, 95 TCAM, 230				
2	次未詳人某	□	新	稅	付	付	付	付	付
3	年次	未詳	人某	納課錢	付	付	付	付	付

録文欄の略号は以下のとおり。

塔里木：黄文弼『塔里木盆地考古記』北京 科学出版社・考古学專刊丁種第三号、一九五八年／TCAM: R. Hoernle, "Three further Collections of Ancient Manuscripts from Central Asia," Journal of Asiatic Society of Bengal, Vol. LXVI (part I) No. 4, 1897. なお、R. Hoernle, "A Report on the British Collection of Antiquities from Central Asia Part II," Journal of Asiatic Society of Bengal, Vol. LXX (part I) Extra No. 1, 1901. 併照。

表III ホータン出土唐代領抄文書一覧

No	文	書	表	題	交付者の官職	末尾表記	文書番号(整理番号)	録文	備考
1	己(789?)年十一月廿五日六城遷野婆捺・可里沒來納進奉絲細抄	抄	抄	抄	判官・薩波	Hedin 16-6	K.T. IV, 173		
2	己(789?)年十一月廿六日六城南全沒納進奉絲細抄	抄	抄	抄	判官・薩波	Hedin 16-9	K.T. IV, 173	六回輸入	
3	己(789?)年十一月廿七日六城南全沒納進奉絲細抄	抄	抄	抄	判官・薩波	Hedin 16-15	K.T. IV, 174		
4	己(789?)年十一月廿七日六城南全沒納進奉絲細抄	抄	抄	抄	判官・薩波	Hedin 16-13	K.T. IV, 174	二回輸入	
5	己(789?)年十一月廿九日六城南全沒納進奉絲細抄	抄	抄	抄	判官・薩波	Hedin 16-25	K.T. IV, 175		
6	己(789?)年十一月廿九日六城薩波屋婆未土・察人盆捺納進奉絲細抄	抄	抄	抄	判官・薩波	Hedin 16-17	K.T. IV, 174	四回輸入	
7	己(789?)年十一月廿九日六城薩波屋婆未土・察人盆捺納進奉絲細抄	抄	抄	抄	判官・薩波	Hedin 16-21	K.T. IV, 175		
8	己(789?)年十一月廿九日六城薩波屋婆未土・察人盆捺納進奉絲細抄	抄	抄	抄	判官・薩波	Hedin 16-23	K.T. IV, 175		
9	己(789?)年十二月二日六城南全沒納進奉絲細抄	抄	抄	抄	判官・薩波	Hedin 16-27	K.T. IV, 176		
10	己(789?)年十二月二日六城破沙禾國下勿闐捺納進奉絲細抄	抄	抄	抄	判官・薩波	Hedin 16-26	K.T. IV, 175		
11	己(789?)年十二月七日六城南全沒納進奉絲細抄	抄	抄	抄	判官・薩波	Hedin 16-30	K.T. IV, 176	二回輸入	
12	己(789?)年十二月九日六城南全沒納進奉絲細抄	抄	抄	抄	判官・薩波	Hedin 16-29	K.T. IV, 176		
13	己(789?)年十二月廿一日六城物薛國・拂里勿闐捺納進奉絲細抄	抄	抄	抄	判官・薩波	Hedin 15-1	K.T. IV, 173		
14	己(789?)年十二月廿二日六城南全沒達門・蘇里捺納進奉絲細抄	抄	抄	抄	判官・薩波	Dunequ C	S.D. tv, 123		
15	午(790?)年三月六日善政坊羅勃口・神山納青麥抄	抄	抄	抄	館子	Dunequ D	S.D. tv, 123		
16	貞元六(790?)年十月四日貨坊楊師・神山納青麥抄	抄	抄	抄	典・刺史	BLORR212-M456Mr. tagh0634	D.C., 187		
17	貞元六(790?)年十月四月末期魏瑟共支殘抄	抄	抄	抄		BLORR212-M449 BL OR8212-M445 Y.I. 030	D.C., 186		
18	年次未詳(8世紀末)	付	付	付		BLORR212-M450 Balaw. 0162	D.C., 185		
19	年次未詳均伽瑟共支殘抄	付	付	付		BLORR212-M451 Balaw. 0161	D.C., 187		
20	年次未詳均伽瑟共支殘抄	付	付	付					
21	年次未詳均伽瑟共支殘抄	付	付	付					

録文欄の略号は以下のとおり。

K.T. IV : H. W. Bailey Khotanese Texts, IV (Cambridge Univ. Press, 1961). / S. T. tv. H. W. Bailey, Saka Documents, Text Volume (London, 1968). / D. C. : H. Maspero, Les Documents Chinois (London, 1953). また西暦への比定については、張廣達・等新江「關於和田出土于阗文獻的年代及其相關問題」（『東洋學報』第六九卷第一・二号、一九八八年）や、高田時雄「コータン文書中の漢語彙」（尾崎雄二郎・平田昌司編『漢語史の諸問題』京都大学人文科学研究所、一九八八年）の成果に負っている。